

# 神奈川県座間市の事例

神奈川県厚木保健所 岩室 紳也

<p>自治体の概要</p>	<p>面積 17.58平方キロメートル 広がり 東西5.3km 南北4.0km 人口125,258人、世帯数48,804。 位置・地勢：東京から西南へ約40キロメートル、横浜から西へ約20キロメートル、神奈川県のほぼ中央に位置している。市域は中央部を南北に縦断する座間丘陵を境として東部には相模野台地が、西部には相模川に沿った沖積低地が広がり、起伏に富んだ地形を構成している。 産業・経済：古くは純農村として栄え、戦時中は軍事基地として、また、戦後は在日米陸軍司令部が置かれる中で、工業と住宅の街として発展をつづけている。</p>	
<p>一 押 し の 事 業</p>	<p>事業名</p>	<p>赤ちゃんとのふれあい体験</p>
	<p>事業の目的</p>	<p>思春期の男女に赤ちゃんに触れ合う機会を提供し、小さな子供への慈しみの気持ちや命の大切さを伝える</p>
	<p>対象者</p>	<p>中学3年生</p>
	<p>事業の概要</p>	<p>夏休みの時期に、中学生約20名と乳児と母約10組でグループに分けて、触れ合う(だっこ、オムツ交換、授乳の実際)。ボランティアとして健康普及員、約5名(各グループに1名ずつ)に協力してもらっている。赤ちゃんの抱き方等の事前演習を沐浴人形を使って実施。</p>
	<p>事業の開始時期</p>	<p>平成10年</p>
	<p>事業の実施に至ったきっかけ (事業の開始の背景)</p>	<p>地域学校保健担当者会議を行なうための連絡調整の中で、相互の問題点や課題を話し合ったところ「母性が薄れている」という声から赤ちゃんとのふれあい体験事業が浮かび上がり、協力者である母子は保健側で担当し、中学生は学校側で担当する形で開始への運びとなった。</p>
	<p>実施についての職場内部の合意形成</p>	<p>保健事業調整会にて説明、意見を得た。</p>
	<p>予算、人的体制 補助金の有無と種類</p>	<p>財政困難な折、予算が必要ではない計画とした。補助金もなし。</p>
	<p>対象者の把握及び選定方法 (ルーチンワークとの関連)</p>	<p>中学校側側と相談し3年生とした。児の月齢については平成10年度はばらつきがあったが、平成10年度の結果中学生がもっとも扱いやすいのが5ヶ月前後(首もすわっている、はいはいする前、等)と解り、平成11年度からは5ヶ月前後とした。</p>
	<p>関係機関への協力要請 (担当者、手段、協力要請の手順)</p>	<p>平成10年度は教育総務部の指導室の先生に助言をもらい、校長会の会長に話をし校長会で了解をもらった後に養護部会に出席し了解を得た。ボランティアについては健康ざま普及員協議会会長に他の保健事業と共に協力の依頼をし、事前に集まってもらい事業内容を説明した。</p>
<p>事業の実施要領づくりに 参画した人</p>	<p>開催要領は事業担当(保健婦)が作成</p>	

	実施できた促進要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健だけではなく、学校側でも思春期保健については「命の大切さ」という認識が育っていた。</li> <li>・中学校6校の内の1校（座間中学）が「命を大切にす視点」のモデル校に指定されていた。</li> <li>・体験学習が重視されていた。</li> <li>・県からの交流派遣の保健婦が保健所勤務時に思春期講座で学校保健サイドと連携を持っていた。</li> <li>・地域での性教育に対して、小学校1校、保育所全所で市役所の保健婦が対応している結果、学校の状況がわかるようになるとともに、携がしやすくなっていた。</li> </ul>
	阻害要因とその克服	学校の授業の中での実施ではなく、夏休みの課外活動という位置付けのため生徒の参加数に限りがある。また、協力してくれる母子の数にも限りがある。学校数を増やすことが今後の課題。
	サービスの受け手の感想	中学生からは「とてもかわいい」、「おもしろい」、「たのしい」、「また体験したい」という感想が多かった。また、母親と赤ちゃんの関わり方を見て、自分自身の母親への感謝の気持ちをもったようである。
	担当者の感想	中学生の表情が変わって行く様子がみられた。スタッフが目的としている「小さな子供への慈しみの気持ちや命の大切さを知る」ことを学んでもらえたと思う。
	取り組みについてのPR	校長会、養護部会で進んでいる。実施状況は新聞に掲載された。
	事業効果の客観的な評価指標	中学生と乳児の母親へのアンケートを実施し、子供も親もよかったという結果で評価している。特に評価指標は作っていない。
	反響や波及効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳児の母親が育児について中学生に説明すること、自分の育て方を見せることで育児を振り返り、育児に自身を持つ事につながった。</li> <li>・参加した中学生が参加しなかった中学生に感想を語るなどして体験の印象、経験を口コミで伝えた。</li> </ul>
	今後の課題	体験できる学校が現在1校のみであり、学校数、開催回数を増やし、より多くの中学生に体験してもらいたい。しかし、実施時期（夏休み、土曜日）等の問題があるので発展性は？？？
ルーチンワーク	各事業の目的をスタッフで確認しているか	・各事業の目的を毎年の保健事業のまとめに記載しスタッフで確認している。その際に保健婦全員で協議している。
	モニタリングとして位置付けているか	モニタリングとして位置付けていない。1歳6ヶ月健診等時間があるところで聞くようにしている。他は流しているだけ。
	事業委託の有無	委託事業（8～10ヶ月児健診、1歳6ヶ月児健診、妊婦健診）については健診票を確認し、事後フォローが必要な場合は電話等でフォローしている。
	直営で実施するメリットを発揮できているか	市町村が実施するメリットは発揮できている。
	ルーチンワークで対応しきれない対象者を把握しているか	ルーチンワークで対応しきれない対象者を把握していない。生涯学習課、各保育園と連携し対応できない対象者の把握に努めている。
計画の進行管理	担当課、担当係内における進行管理の状況	保健婦活動のまとめを作成する際に評価をしている。

	進行管理組織の構成	進行管理組織として母子保健推進会議を設置 2年目は育児支援について検討する。 母子保健推進会議を住民の声を聞く場としても位置付け、3人の住民代表が参加している。					
	進行管理組織に下部組織があるか	な し					
	関係機関の取り組みについての情報	母子保健推進会議の中で関係機関の取り組みも紹介されているが、母子保健計画推進会議で初年度に委員から否定的な発言がありその後は全般的な報告はしていない。					
	評価指標についての論議が行われているか？	議論はない					
母子保健事業評価	評価指標の決定プロセス	評価指標は担当で検討し、保健婦間で決定					
	評価指標は関係者により認知されているか	関係者に認知されていない					
	評価のための情報収集	評価はアンケートで行なっている。4ヶ月健診は一定期間、母親父親教室は毎回、地域学校担当者会議では会議後に実施した。育児相談でも今後アンケートをとる予定。					
	評価結果を住民や関係者に還元しているか	評価結果は住民や関係者に還元していない					
マンパワー	マンパワーの変化		H 7	H 8	H 9	H 10	H 11
		保健婦	9	9	10	10(1)	8(2)
		栄養士	0	0	0	0	0
	マンパワー増の決め手	母子保健事業の移管と介護保険準備 平成11年度2名採用予定であったが充足できず。 栄養士の採用は平成12年度に予定					
	保健所との人事交流	あ り(平成9年から平成10年)					
自治体内の専門職の異動	あ り						
予 算	予算の変化(印象)	増えた					
	予算増加の決め手	計画ができたことと予算確保と関連しない					
	評価指標の有効性	評価指標は有効ではなかった お金のかからない事業を中心に組み立てて行きたい					
住民の主体性	主体性が向上したか	向上した					
	主体性向上を示す具体例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公民館で行なっている「母と子が共に育つ教室」のOBの母が、地域で育児に悩むお母さん方への支援を考えている。公民館と保健婦と一緒に関わり、市事業との連携も検討中。</li> <li>・社会教育が盛んで2歳からの育児支援は行っていた。0,1歳の支援をテーマにして「母と子が共に育つ事業」の卒業生による事業を検討している。</li> <li>・親の意識が変わってきた。ボランティア精神があり、何かしたい、社会参加をしたい、自分の体験を地域に還元する機会が欲しいと思っている。住民自身の中で経験を話したい、人の話を聞きたいという住民同士の二つのニーズが合致した。</li> </ul>					

	主体性を引き出すために有効だった取り組み例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育児サークルのお母さん方が集まり、座間市の育児情報「ざ・まっぷ」を作成するのを生涯学習課が支援している。</li> <li>・保育園開放に関する保育園園長の評価は好意的で、離乳食、おむつトレーニング、等親同士の情報交換で済むものが多いという評価から与える事業から住民主体の事業への転換が図られている。</li> </ul>
計画を推進するうえでの困難		<ul style="list-style-type: none"> <li>・育児支援の中で、孤立している母子のために友達づくりとして「なかよしベビークラス」を実施しているが、本当に孤立している母子が参加できているのが疑問であり、住民の真のニーズに対応しているかを評価できない。</li> <li>・育児相談が年々増加し、年間28回でも対応できない状況になっていた中で住民の声として「育児相談を地域（保育所）でしてほしい」というのがあった。自主的、積極的に公園デビューできない人のために情報誌（市内保育園開放一覧）を発行し、健診で配布した結果保育園開放を利用する人が増えた。しかし、保育園事務担当者は必ずしも好意的ではなく根回しのために時間を割いた。</li> </ul>
計画の見直し		<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成9年度は移管されてきた事業を運営するに精一杯であったが、3年間実施した結果、少しずつ個々のケースが持っている問題に対するフォローにも目を向けられるようになってきた。今後は虐待の早期発見等も計画に取り入れて行きたい。</li> <li>・13年度に見直しをする予定。それまではデータを蓄積している。</li> <li>・いかに育児不安が解消しているかを重視し、アンケート（4ヶ月時）等を評価指標にしたい。</li> <li>・評価指標として人材育成（育った市民、住民の数）を取り入れたい。</li> <li>・市民、公民館（3）と事業を開始し、将来的にはコミュニティーセンターレベル（将来的には11）に発展させたい。</li> <li>・きっかけづくり、しかけづくりを市が行なうが、将来的には住民主体の事業展開にすることを目標にしている。</li> </ul>
保健所への期待		今後の計画見直しの時にも参加、協力していただきたい。また、細かな助言、指導等の支援を期待している。

## 訪問調査者のコメント

座間市の訪問調査は計画策定プロセスの調査に引き続き2回目であった。しかし、前回調査時は同じ神奈川県内の保健所に在籍していたが、管轄が異なる場所であったため訪問調査時の情報のみで分析しなければならなかったが、訪問決定後に管轄の厚木保健所（市町村支援の直接担当課ではない保健予防課）に転勤してきた関係で、保健所の関わり方については内部から客観的に見る事ができた。

### 保健婦のヘルスプロモーションの視点

座間市は母子保健計画策定時に県から交流で派遣されていた事務職の方が計画づくりを通して専門職である保健婦に対して行政の役割である「住民参加、関係機関との連携によるヘルスプロモーション」という意識付けを心がけていた。計画書や事業の中で「ヘルスプロモーション」という言葉を使っているものがないものの、専門職である保健婦はその理念を体感的に理解し、実践しているという印象を強く持った。住民参加では、住民の意識が変わり、ボランティア精神があり、何かしたい、社会参加をしたい、自分の体験を地域に還元する機会が欲しいと思っていることを察知し、住民自身の中で経験を話したい、人の話を聞きたいという住民同士の二つのニーズが合致させる事業展開を当然のこのようになっている。具体的には、住民の声を敏感かつ巧妙に引き出し一人の母親からの申し出があると先輩ママ教室、等でグループづくりへと展開している。保健婦自身に「人材育成の視点」という言語化された意識

は必ずしもないがこの視点を見失うことなく、むしろ意識して事業展開をしてもらいたい。

関係機関との連携についても教育分野、保育所、公民館、等を確実に巻き込み、現場レベルでの情報交換を大事にすることで保健サイドだけでは解決できない課題に取り組んでいる。あまり戦略的ではないが、一つずつ問題を解決していこうとしている。これが単に思いつきに終らず、戦略的な動きへと発展すれば市政を巻き込んだうねりへと発展する可能性を感じた。

#### 保健所の役割

市の勢いを感じる一方で保健所の役割について保健所サイドが戸惑っている、市もどのように保健所に関わってもらえればいいのかわからないというのが転勤当初の率直な感想であった。しかし、保健所内の市町村母子保健支援担当課の保健福祉課長は会議等あらゆる機会を通じて市町村の母子保健事業の評価を求めていた。(本来なら他課の課長を活用しないという意識も出かねないところを逆に)岩室保健予防課長の転勤を積極的に活用し、母子保健関連の保健所や市町村の会議、母子保健研修会、管内市町村の母子保健計画評価事業、等々で市町村と直接接触する機会を与えていただいた。これからは「保健所が指導する」、「市町村が指導される」のではなく市町村と保健所が「共に悩み考える」という雰囲気母子保健事業の評価が進むことが重要である。保健所内部の人材も事業担当制や地域担当制に縛りすぎず、適材適所の活用を保健所内部で柔軟に行う事で保健所の役割を発揮することが期待されていると思われた。

#### 今後への期待

育児支援、虐待防止の具体的、かつ効果的な方法を明らかにすることが急務である。座間市では虐待の具体例を経験する中で「乳児期の親の支援がもっとも虐待の予防になる」という仮説を立て、公民館に在籍している熱心な社会教育指導員を中心にモデル事業を立ち上げることを考えている。常に前向きに、積極的に取り組んでいる事は大いに評価されるが、これらの動きを地域住民、市役所内部、あるいは全国へ発信する事を怠っている。そのため保健分野の認知が低く、マンパワーが充足されているとはいえない。単に保健婦の認知につなげるだけでなく、真の意味でヘルスプロモーションが進むためにも「SHOW」、「PR」を心掛けていただきたい。今後は戦略家となることが重要である。